

動ブツたちから見た世界

平田剛志

彫刻とは、モニュメントであった。神や王侯に奉げられた古代ギリシアの神殿、エジプトの墳墓からオーギュスト・バルトルディ《自由の女神》(1886)など古今東西にモニュメントは見られる。日本の近代彫刻においても、高村光雲《西郷隆盛像》(1889)、北村西望《寺内元帥騎馬像》(1922)、忠犬ハチ公像から戦後のパブリック・アートまで、数多くのモニュメントが作られ続けている。

これらモニュメントの特徴は特定の場所と結びつき、歴史や神話、宗教、国家、平和、人や動物の顕彰、事蹟の記念などを表象する墓や銅像として、公共的、恒久的に建立されることである。モニュメント (monument) の語源は、ラテン語の *monere* (思い出させる) が語源であるように、彫刻は記憶を永遠化する造形物であり、「存在」を思い出させるモニュメントなのである。

対して、「不在」のモニュメントが展示されたのが、小林耕二郎の個展[動ブツたち動く]である。今展は、人間とは異なる「動ブツ」の視点を通じて、「他の世界」＝「動物達の住む世界(環世界)」を探究した展覧会であった。

会場に入って目にするのは、《不在のモニュメント》である。さまざまな大きさのダンボール箱約 20 個が整然と並び、その上にドーム型の灰色の塊が載っている。その丸い塊は、韓国のまんじゅう型の墓、古代インドの丸く土を盛り上げた墳墓・ストゥーパを思わせ、墓のようにも見える。だが、ダンボール箱から出された作品が展示を待機させられているようでもある。

会場を奥へ進むと、ダンボールに木で脚立や足場台を模したものが載せられ、その上に土色をした粘土状の塊が載った《掘り出し物 01・05》、土器が壁面とダンボールに挟まれている《植え替え》が見えてくる。いずれも石膏や土などの塊はダンボール箱を台座とし、この場にはない動物の不在＝痕跡を指し示すように、ダンボールの側面には犬の四肢などがレリーフとして刻まれている。

いったいこれらダンボール上にある丸い塊は何なのだろうか。その鍵穴は、ダンボールに刻まれた「動ブツ」の足にある。小林は「犬になってみて穴を掘り、その穴を模ってみる」と書いているように、これらの丸い塊は小林が犬のように穴を掘り、その形状をかたどってダンボール上に伏せたものなのだ。つまり、小林は犬が穴を掘る習性を模倣し、掘った(彫った)穴を型として彫刻としたのである。さらに、工業製品のダンボールを台座とすることで、プリミティブな造形物と人工的な工業製品を組み合わせただのだ。

では、なぜ穴型の塊はダンボール上に置かれるのだろうか。穴とダンボールには共通点がある。どちらも、穴という空虚、空箱という不在の空間である。小林は「不在の穴」を抱えられ、運べる「移動する構造体」であるダンボール箱に設置することで、恒久的、永遠化を志向するモニュメントの特性に対して、設置の不安定さ、仮設的な場として構築するのである。

では、「不在」とはなんだろうか。それは、「記憶」ではないだろうか。そもそも犬にとって穴を掘る行為は、犬の祖先である狼に由来する。狼は、土を掘って巣穴を作り、暑さや寒さをしのぎ、外敵から身を守り、出産や子育てを行った。また捉えた獲物を穴の中に埋め、餌を蓄えた。つまり、犬にとって穴を掘る行為は、かつての野生の本能であり、「狼」の記憶なのだ。ゆえにダンボールの側面に刻まれた犬の四肢のレリーフは、狼が犬へと家畜化し、人間に飼育・管理され、ダンボールならぬ犬小屋に囲われる生態を示している。一方、人間にとって穴を掘る行為は、遺体を埋葬することが主目的であり、記憶を喚起する墓＝モニュメントを設けることだと言えるだろう。

つまり、穴を掘る行為は、犬や狼にとっては生存を意味し、人間にとっては死と結びついている。だが現在、家畜化された犬にとって穴を掘る行為は失われた本能の名残でしかなく、巣穴の中で生活することはない。墓もまた人間の名残を留める「不在」のモニュメントである。穴とは、犬も人間もともに忘却した記憶が埋められた「不在」の場なのだ。

白川昌生は、「記憶は喚起するモノがなければ、いつまでも忘却の中から目を覚ますことはない（・・）彫刻は忘却の手前に立っている標識でもあり、目覚めを引き起こすモノでもある」¹と書いたが、小林の本展は、人間と犬（動ブツ）の環世界間移動をすることで、私たちに目覚めを引き起こすモニュメント＝異ブツであった。

穴を掘る行為が狼の本能の名残ならば、人間の本能的行為とは彫刻をつくることなのかもしれない。野生なき現代、忘却に抗うための彫刻こそ、いま私たちに必要なモニュメントである。

¹ 白川昌生「近代・モニュメント・戦争」『彫刻の問題』トポフィル、2017年、32頁。